女子美

No.153/2006

2P　OGインタビュー　大竹真利さん
5P　ライブラリー・トーク報告①
6P　インターンシップで仕事を知る 他
7P「多彩な響き 大村コレクションにみる女子美卒業生展」報告 他
8P　女子美祭2005
10P　OGインタビュー　石井礼子さん
12P　女子美アートミュージアム展覧会情報
13P　バーミンガム・アート・デザイン学院からの交換留学生
14P　シリーズ　卒業生の美術館② 他
15P　アート・セミナーに行こう！ オープンカレッジセンター 他
16P　フィンランド・フランス美術大学見聞録
17P　日本と中国を繋いだ「友好の美 展」
18P　100周年記念大村文子基金
19P　シリーズ歴史資料紹介⑫ 他
20P　公募展受賞者紹介 他

女子美術大学広報誌

Interview・1 OGインタビュー　ドキュメンタリー編集者　大竹真利さん

TBSの「情熱大陸」、テレビ朝日の「驚きももの木20世紀」や「素敵な地球船地球号」、NHKの「課外授業ようこそ先輩」、NHK BSハイビジョンの「遠くにありてにっぽん人」など、フリーランスの編集者として数々のドキュメンタリー番組の編集を手掛けている大竹さん。絵画科洋画専攻の卒業生でドキュメンタリー専門に26年続けているベテラン編集マンだ。ドキュメンタリーの「編集」とはどんな仕事なのか。お話を伺ううちに大竹さんの「影のディレクター」とも言える仕事ぶりが浮かび上がってきた。

デスクの仕事から編集へ

「大学時代はまだ自分が将来やりたいことがなかなかわからなくて。デザイナーの就職試験なんかも受けたりはしたんですけども、やっぱり落っこちて。かといって絵描きとしてやっていけるわけでもない。そんな時、たまたま兄の友人が録音の仕事をしていて、番組のデスクの話をもってきてくれたんです。とりあえずやることもないしと思ってやることにしました。大した仕事内容でもなく、スケジュール調整したり、フィルムを取りに行ったり、言うなればお使いですよね。」
その頃はまだ、屋外での撮影がフィルムで行われていた時代。フィルムは高価だったため、ドキュメンタリーの場合、ディレクターが自分で考えた構成をある程度計算しながら、撮影していた。ところが大竹さんが働きはじめてすぐの頃、屋外でのシーンもすべてVTRで撮影できるようになり、安価なVTRテープのおかげでたっぷり撮影できるようになった。と同時に編集に時間がかかるようになり、本編集の前にあらかじめワークテープで編集しておくという作業が必要になったという。
「たまたま当時私がいた会社というのは、ものすごく難しい編集機を入れたんです。ちょっとやそっとじゃ普通のディレクターが覚えられないような機械だったんで、当時のカメラマンから、『真利ちゃんこれからはビデオの時代だから、編集マンをやっとくと食えるよ。やってみない？』とか言われて。そういう専門の学校に通っていたわけじゃないし、仕事は現場で何人ものディレクターにつくことで覚えました。」

編集マンがいる意味

ゼロの状態から15分の旅番組に3年ぐらい携わって、本格的に編集マンになることを考えはじめた頃、その会社に出入りしていたフリーのディレクターからたまたまドキュメンタリー専門の会社を紹介してもらったという。
「始めの頃はほとんどオペレーターです。ここからここまでとか、あと1秒プラスとか言われてつなぐ作業をやっていく。だからその頃は、言われた通りにつなぐだけで『私はどこにいるんだろう』みたいな気持ちがありました。いろんなディレクターに『編集マンがいる意味ってどういうところ？』と聞いたりもして。でもだんだんある時、『私が決めていいんだ』みたいに気づくときがあるんです。きっと何の仕事でもそうだと思うんだけど、『私が決めていいんだ』っていうところを見つけると、すごく面白くなってきて。」
編集マンはディレクターが思いつかないようなつなぎ方をしてみせたり、常に「普通の人の目」を持ちつづけながら、客観的に映像を見て面白いかどうか、わかりやすいかどうかの判断をしなければいけない。仕事を重ねるうちにディレクターは大竹さんが「面白い」と思うものに興味を持ち、大竹さんの感性を信頼しはじめたのだ。

50～60時間の映像を見る

編集の仕事はロケがおこなわれた後に映像を見るところからはじまる。
「ロケでは1時間番組を作るのに番組にもよりますが大体50時間から60時間ぐらい撮ってくるんです。それをまずは全部見ます。大体4～5日間ぐらいでディレクターにいろいろ説明を受けながら全部見て、それをどんどんノートしていくんです。『村ロング（遠景）キレイ』とかインタビューなら使えそうなところとその内容、言葉にしにくい時は簡単なイラストを描いたり、話はいいんだけどイマイチ説得力に欠けるかなという部分には△、というふうに記録していきます。編集の人それぞれにやり方があるんですけど、はじめのプレビューの段階で大体使えるものを判断してノートを見ただけでわかるようにしておかないといけないんです。100ページの大学ノート1冊くらいは書きます。1日に10時間分くらいしか、見られないですけど。」

構成を練る

「見終わった段階で、1時間番組の場合だいたい1日かけて構成を考えるんです。その番組をどういう話の順番でどこにどういう部分を持ってくるか。頭にやっぱり面白い部分、つかみとか、こういう番組ですよっていう紹介をやらないといけないし、民放であればCMの前に何をもってくるかという計算もある。どこそこに訪問とか、何とかインタビューとか、シーンの名前を

全部ポストイットに書いて、壁一面に貼って考えます。『ここで地名を出して、地図を出して…』とか。『この人物好きになってもらわないとまずいよね』といって、登場人物の魅力が伝わるシーンを始めに持ってきたり、『でも深入りした話はまだ早いよね』とか言いながらディレクターと一緒に考えるんです。ポストイットはこの業界のためにできたんじゃないかっていうぐらいものすごい使いますよ。」
昔は、ドキュメンタリーは「起承転結」という構成で作るのが大半だったという。
「ある所にこういう人がいて、こういう事をしてて、ところが大変大変こんな事が起こって、でも彼はこういう行動をして、結局こういう事になった、みたいな。でも今はそういう、頭の部分でちょっと我慢して見ていてくれれば後で面白いんだよっていう番組が全くウケないわけです。みんな、ピッピッとチャンネルを変えてしまう。で、頭でいきなり結末！みたいなこともあるわけです。赤ずきんちゃんなら、ある日猟師が狼を撃ったらお腹から女の子とおばあちゃんが出てきた。エーッなんでー？から始める。とかね。」

映像をつなぐ

「そのあと実際に映像をつなぎはじめるんですが、そうすると、『そっか、あの話を先にしておかないとこの話全然わからないね』とか、『あれはもっと後のほうがいいね』とかいう部分が出てきて構成の通りいくということは絶対にない。そこでものすごく苦労しながら、とにかく最後まで映像をつないでたたき台を作る。それをもとにしてまたつなぎ直すというのを、少ないときで4、5回、多いときで10回くらい繰り返します。途中プロデューサーが試写して、意見を聞いて直して、そして終わり近くに局試写があります。テレビ局のプロデューサーが見て、いろんな意見をかなり言われる。それがスッと通ればいいし、『これは話が全然違うよね』みたいに言われるときもあるし、逆にグッドアイデアをくれることもある。」
1時間番組の場合、編集の全工程を3〜4週間で終えるという。
「若いときは『3日帰らなかった』ということもありましたけど、今はなるべく徹夜はしたくない。（笑）電車で帰れる時間には帰るようにしていますね。経験の浅いディレクターと仕事をする場合には『このままのペースで進めていくと徹夜になるなあ』と思うと、『この話はこういうところにくるとあんまり面白くないのよね』とか先まわりして言ってみたり（笑）。」

素材を活かした料理をする

「例えばドラマっていうのは酢豚作りみたいなものだと思うんです。いい豚があって、タケノコとタマネギとにんじんと椎茸と用意して、それでやっぱり味は決まっているけど、最後に手抜いちゃいけないね、みたいな。だけど、ドキュメンタリーは、今日はカツオを釣ってくる予定ですっていって、カツオは釣れたけど、というところからはじまって、『刺身がいいかね』とか、『いや、たたきにしようかね』とか、『この部分は煮てもいいね』とか考える。でも『カツオを捕ろうと思ったらカツオじゃなかった』っていうこともあるわけですよ。素材が採れてから料理を決めるのがドキュメンタリーですね。中には企画の段階では『八宝菜作る予定です』っていうんだけど、素材を見たら、『ちょっと八宝菜はできないけども、五目焼きそばだったらおいしいのできるんですけど』みたいなこともある。せっかくおいしいそばがあるんだったら、やっぱりそばを活かした方がいいと思うわけです。すると、局のプロデューサーから、『うちは八宝菜頼んだはずなんですけど』って言われることもあるし、その後で『でもおいしいから焼きそばでもいいよ』って言ってもらえることもある。逆に、カメラマンから『今日は立派な大根取ってきたから』って言われて『八宝菜には使えないんだけど』みたいなこともある（笑）。でも、基本的にはいいと思ったものをなるべく活かしたいんですけどね。」
さらに編集の面白さをこう語ってくれた。
「例えば『あーっ』ていうおじさんの顔があるとします。その後にステーキの絵を入れたら、このおじさんはステーキが食べられるうれしいおじさんになるわけですよね。でも、そのおじさんの顔の後に、すごいきれいな女の人が眠っている顔を入れたとしたら、このおじさんは襲うおじさんになるわけですよね。つまり次に何を持ってくるかで、おじさんのキャラクターが変わっちゃう。モンタージュ理論というんですが、どっちを先に見せるか、何の場面の後に何を持ってくるか、編集によってイメージも意味も面白さも変わるんですよね。構成づくりはそういうところがすごく楽しい。でも責任も重大です。間違った印象を与えてはいけないし、取材を受けてくれた人を欺いてもいけない。最後のチェックポイントでもあるんです。」

最近一番深く関わった作品

TV朝日で2005年の2月に放映された「青いツバメ〜秋野豊 タジキスタンからのEメール〜」というドキュメンタリー。これが最近では大竹さんが一番深く制作に関わった作品だ。政府と反政府勢力の内戦下のタジキスタンに、外務省から国連政務官として紛争解決のために派遣された筑波大学助教授の秋野豊氏が1998年に現地で殺されてしまった事件を扱ったドキュメンタリーで、秋野氏がどんな活動をしてきたのか、またそもそもタジキスタンとはどんな国なのかを紹介しながら事件の真相に迫るものだ。
「私自身も秋野さんのことを知らなかったんですが、見る人も『何の仕事なの？これは』と思うと思うんですね。国連の仕事で派遣されて行ったと聞いても、何をやっているのかわからないじゃないですか。それをまず解決しないと、と考えて始めのほうで紹介しました。でもそれがあんまりまじめな話だと観ていてつまらないですよね。」
番組は俳優の泉谷しげるさんと優香さんが、

秋野氏が現地から家族に送ったＥメールを朗読する場面からはじまり、その後、泉谷しげるさんがタジキスタンに赴き秋野氏の足跡を辿りながら進んでいく。
「あの番組は構成作家とディレクターが調査してまず台本を作る、構成ドキュメンタリーなんです。『大体こういうストーリーで再現シーンもこういうふうに撮って…』みたいな。でも実際に現地に取材に行くと、泉谷さんが現地の人たちと触れ合ったり、秋野さんを知るおばあちゃんが出てきて泉谷さんにピラフをごちそうしてくれたりとか、そういうディレクターや構成作家が想定していなかったとてもいいシーンがたくさん撮れたんです。『秋野さんがあれだけ現地の仕事に力入れる理由がすごくわかるよね』って思わせるシーンが。そういうシーンを大切にしながら、秋野さんの亡くなった意味も考えながらディレクターと一緒に構成をやり直しました。」
番組には泉谷しげるさんが秋野氏を殺した犯人のお母さんに会って話を聞く場面もある。
「『何だかわかんないやつに殺されちゃって運が悪かったよね』っていう話じゃ、あまり意味がないわけですよね。犯人のバックグラウンドを考えれば、犯人もそうなってしまった原因は社会にあるよねというところまでやらないと。だから、その話をどこに入れるかとか、でも、ここを変えるとなんか犯人が主人公に変わっちゃった感じがするとか、そういうことを考えて、いいシーンもなるべく捨てずに、どういうふうに結末に結びつけていくかというのが、ものすごく大変だったんです。」

取材者が喜んでくれる

「番組作りをして一番うれしいのは、取材をした方たちが喜んでくれることです。『青いツバメ～タジキスタンからのＥメール～』に関しては、秋野さんの奥さんがオンエアのあとメールをくださったのですが、大変満足してくださって。秋野さんのお嬢さんたちも喜んでくださって、父親の亡くなった場所へ初めて行ってみたくなったともおっしゃっていて。秋野さんの兄弟、友人、教え子の方たちからも満足と感動のメールをたくさんいただきました。そして、担当プロデューサーから『数字（視聴率）はいかなくても、こういう番組を作ったスタッフを誇りに思います』というメールをもらったんです。構成作りはとても大変だったけど、楽しい思い出に変わる瞬間ですよね。」

努力して興味をもつこと

学生時代には芝居が大好きで、つかこうへいさんのものやテント芝居にも頻繁に足を運んでいたという大竹さん。学生時代の思い出を聞くと、こんな答えが返ってきた。
「女子美祭のときに朝倉摂さんの講演会があったんですが、誰かが舞台美術家になるには何の勉強をしたらいいですかって質問したんです。そのときに、『具体的には設計とかいろいろあるけれども、あなたたちに今できるのは、いろんなことに好奇心・興味を持つことです。』って、言われたんです。それがすごく印象に残っていて。『しかも興味は努力しないと持てないんですよ。興味って待っていて自然と湧いてくるものじゃなくって、努力しないと持てないんだからね。』と。こういう仕事をしてみて、やっぱり本当にそうだったなと思っています。女子美のときに会った人とか見たものとか芝居とか、それが全部今の栄養になっている。すごい財産になってるなって思うんです。やっぱり女子美に行っていたから今私がここにいるんだな、こういう考え方しているんだなというのは確実にありますね。」

夢を持つ＝人生の入り口に立つ

大竹さんは幼稚園のときから絵描きになりたいという気持ちがあったという。途中、アナウンサーやデザイナーへの道などにも惹かれつつ、美大へ。大学時代は教師の道も考えて教員免許も取っていたという。
「若い頃って、職業の種類をあんまりわかっていないですよね。いろんな仕事があるってことが社会に出てみないとわからないですよね。ディレクターになりたいといって会社に入ってくる子たちでも、途中で編集マンに変わる子もいるし、プロデューサーになる子もいるし、自分は調査に向いているといって調査員になる子もいる。だから、取りあえず『絵描きになりたい』とか、『アーティストになりたい』とか、そういう夢を持つことは絶対に必要だと思うんです。でも、夢を持つっていうことは、人生の入り口に立ったようなことで、きっとそこからですね、いろんなことがわかるのは。その後入った社会の中でいろんなことを見たりやったりしながら試行錯誤しているうちに、自分にピタッとくる、やっていて面白いことに出会うと思うんです。そのときに大学時代をどう過ごしていたかっていうのが、大きな財産になってくる。栄養になってくると思うんです。もちろん、夢の通りストレートにいけば一番幸せなんだけども、でもそれ以外にももっと自分にピタッとする仕事があるかもしれない。だからあまり限定したり、夢に縛られることもないのかなと。動物学をやっていた人や音大を出た人でディレクターになっている人もいっぱいいます。本当に。」
現在はＶＴＲ機もほとんどなくなり、パソコンによるノンリニア編集で仕事を続けているという大竹さん。今後どんな番組の編集に携わっていきたいかを伺うと「せっかくやるのであればやって意味のある番組を作りたい、しかも面白く、ね。」と答えてくださった。

（インタビュー・文　広報課　林 亜紀子）

2005年 北海道テレビにて放送

プロフィール
大竹　真利（おおたけまり）
女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒業
番組制作会社勤務、その後番組編集に携わり、
3年後にフリー。

Library・ライブラリー・トーク報告① 書体設計家　鳥海修氏

図書館では今年度、昨年度に引き続いて大学院デザイン担当の森啓先生による“書物”をテーマにした連続企画をおこなっており、書体設計家の先生方を迎えての講演会を開催してきました。今号からシリーズで講演内容を紹介します。
本文組みという領域では最近使用頻度が高いヒラギノと游明朝体という書体。今回はそれらの書体設計をなさった鳥海先生の講義です。

「水のような　空気のような書体をつくりたい」

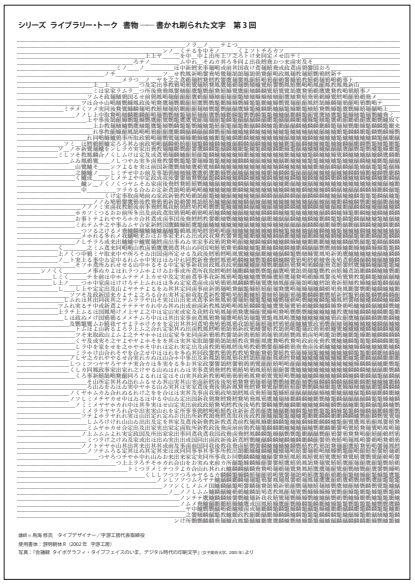
僕らは書体をつくる字游工房という会社なんですが、本文書体に対して凄くこだわりをもっています。一般に書体といってイメージするのは、ポスター等で大きく使われている文字だと思います。そういう見る書体のことをディスプレーフォント、ディスプレー書体、というふうにいいます。それとは別に書籍や雑誌で使用される、読む書体を本文書体といいます。読む書体よりは見る書体の方に興味がいくのが普通かと思いますが僕はその本文書体に何か魅力を感じるんです。
小説や雑誌を読むと細かい字でいろんな情報が書いてあります。教科書にしても、小学校の教科書には教科書体が使われていたり、中学からは明朝体が使われていたり。それらの昔から自分が日常的に触れていた書体というものを人がつくっているという事実をはじめて知ったとき凄くショッキングだった。ある人が明朝体の、小説を読むような文字を「水のような、空気のような書体」というふうに表現したんです。それを聞いて僕は凄い衝撃を受け、自分はこれをやりたい！と思った。何でそれがそんなにいいものに見えたのか、僕は今でもよく分からないんですが、何か、魅力的に思ったんです。書体をつくる人ってあまり表に出てこない。だいたい、誰々がつくった文字だっていうのを意識しながら読むっていうのは煩わしいじゃないですか。とにかく小説を読めば内容にすっと入っていけて書体なんか全然気にしないで楽しめるという、そういう書体のあり方が僕にとって魅力なんですね。それともう一つ、本文用書体が印刷文化というか文字を使うその文化の底辺を支えるものという考えがあります。だから、この本文書体のあり方が、日本の民度をはかる基準だとか、ちょっと大袈裟なことを言いますけどもそんなふうにも思ったりします。

「字游工房の書体　ヒラギノと游明朝について」

ヒラギノのデザインコンセプトは、現代的なスタイルであること、スタンダードであること。カタログやビジュアル雑誌に使うことを目的とし、均一なトーンになることを優先させる。画像と組み合わせる書体なので、複数の太さ、ファミリーを用意し、同一紙面での統一的な組み版イメージを実現する。縦組み、横組みに最適化させる。あとイメージの決定ということで、明朝体の中で僕らが目指したのは「若々しい、さわやか、クリア」ということです。というのも、若々しい明朝体っていうのがなかったんです。しっとりというか、古いとも言えなくもないような書体が主だった。
游明朝体とヒラギノを比較するとわかりますが游明朝体はどんな大きい文字でも仮想ボディー（文字を設計する際に基礎とする正方形）の中に収まるように設計しています。ヒラギノははみ出させたんですよ。例えば筆書きの「うつくしい」っていう字をイメージすると、「う」って上下に長いでしょう。それで、「つ」が横に長い、平べったい感じ。で、「し」はすごく長い。ヒラギノではこういう文字が本来持っている、その形みたいなものを積極的に打ち出そうと考えたんです。この仮名っていうのは、イメージとしては、平安時代の上代仮名ってあるんですが紀貫之ですとか、藤原豊成とか高野切第一種とか。そういう名筆といわれている古筆、それを少しイメージしたのヒラギノがなんですよ。
字游工房の1番特徴的な所としては、漢字を、アキが比較的均等に散らばるようにつくっています。文字のある部分を狭くつくると、印刷したときにそこが滲んで黒く表現されたりするのが嫌だからです。仮名は、漢字に比べて字面（文字の左右上下の幅のこと）が違います。漢字はあんまり変わらないですが仮名の場合は積極的に変えました。本文用書体は仮名が小さい方が読みやすいのではと考えるからです。テキストを読む際に漢字だけ拾い読みをしていってもある程度は意味が通じる、そういう部分もあるので。漢字と仮名のバランス。これが本文用の明朝体をつくるときにいろいろ考えることです。

「サントリーと京極さん」

游明朝体は小説を組むための書体です。游明朝体R（Regular）を少し太くしたのと、



ポスター作成：佐賀一郎（大学院美術研究科 博士後期課程 美術専攻 造形表現領域1年）

D（Demi Bold）がサントリーが出版物で使う明朝体の制定書体になりました。サンアドのデザイナー葛西薫さんが使い方マニュアルを作っているそうです。アルファベットは外国の会社のものを使っているので游明朝体とは別だということで「サントリー明朝」、「サントリー明朝 D」っていうふうに名前がついています。あと、この游明朝体 R なんですけど、これは京極夏彦さんに源字を見せたところ、えらく感動してぜひこの書体で本を作りたいということになりまして、菊池信義さんが装丁をやっている分厚いシリーズが今3冊ぐらい出ているようです。読みやすい書体というふうに京極さんのお墨付きをもらったわけですね。
本文用書体のすごい所っていうのは、どんな文字とも組み合わされるっていう所なんです。ロゴとは違う。ロゴはある言葉、あるコピーに対して、それしか動きようがないんだけれども、本文用書体の場合はどんな文字とも組合せ可能、だからあんまり目立ったことはできない。大きさも太さもある程度決められてしまう。そういう制約の中でいろんな表現をしている所が何となく奥ゆかしいというか、魅力だと思ってます。
今日のこの本文書体の話が、本屋さんなんかでこの書体は何だろうとか、何か違うねっていうようなことを、見るようなきっかけになったら嬉しいです。「の」とか見て。「の」っていっぱい出てくるから「の」の形を覚えると書体はすぐ見分けられます。そんな感じで書体探しゲームをしてみてください。

NEWS・1 インターンシップで仕事を知る

最近では多くの会社が導入しているインターンシップ。今回ご紹介するのは、8月22日から9月2日までデザイン学科とメディアアート学科の将来広告制作分野での活躍を目指す学生が株式会社広告製版社に受け入れていただいたものです。広告製版社のご協力により、学生は2週間のうちに製版の知識を深めるだけでなく広告制作における企画・デザインから製版・印刷までのワークフローの全過程を実体験し、最終的に課題制作までやり遂げることができました。

ひとのために作っている

川崎　綾
（芸術学部デザイン学科3年）

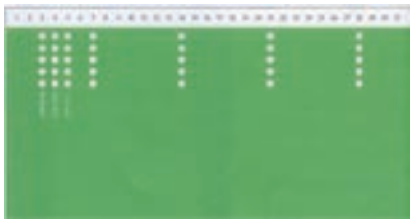
2週間のインターンシップは、見るもの全てが新しく、聞くことすべてが面白く、毎日充実して過ごすことができました。私たちのために1日1日のスケジュールを事細かに立ててくださったおかげで、製版の仕事を体験するだけでなく、新聞広告という視点から、広告主、制作会社、製版会社、新聞社へと進む工程を経て、最終的に一つのものが私たちの目に触れるまでの大変さ、嬉しさを初めてきちんと学ぶことができました。工程は異なってもその過程で共通することは、ひとのために作っているということです。それは実際に仕事としてやってみなければ本当に理解することは難しいとは思いますが、改めて考えるきっかけになりました。学校では学ぶことが難しいことばかりでしたが、大事なことばかりだと思います。ご協力くださった企業のみなさまには心から感謝しております。

課題－カメラマン小林（広告製版社スタッフ）のポートフォリオと名刺
まずは小林さんをよく知ることからはじめ、アイデア出し、コンセプト作り…と進めていったそうです。2週間という短い時間の中で「常に切羽詰っていた」ということですが、よくできています。

どの立場で広告に関わりたいかを考えるヒントに

山崎　美加
（芸術学部メディアアート学科3年）

二週間という短い間でしたが、とても充実した日々を送ることができました。一週目は広告制作の過程や昔の製版技術を学びました。広告制作と一口にいっても、広告主や制作会社、製版・印刷会社など様々な企業が関わっていることを知りました。それぞれの仕事に携わる方の話を聞き、自分はどの立場で広告に関わっていきたいのかを考えるヒントになりました。二週目は課題制作とプレゼンテーションを行いました。学生以外の方に向けて発表したことは貴重な経験でした。
就職について考えるようになった頃、まずは動いてみようと思いインターンシップに参加することを決めました。就職活動が本格的に始まる前に企業を体感したことは、とても幸せなことだったと確信しています。知識を得ただけではなく自分自身を見つめ直す契機となりました。今回吸収したことを学生生活・就職活動に生かしていきたいと思います。



課題－2006年広告製版社のカレンダー
「会社から出すものなので、社風や渡す相手を考えて制作しました。」という山崎さん。四季色のイメージを色彩の明るさで出したり、「何月」と書かずにドットの数で月を表現しているそうです。

Topics・1 石の絵具制作キット発売

芸術学部絵画学科日本画専攻の橋本先生が指導・監修した「サハラ砂漠の砂」「孔雀石」「藍銅鉱」など6種類の素材と「はがき」「筆」が入った石の絵具制作キットが10月より東京サイエンス株式会社から発売されています。また、昨年来、先生と東京国際ミネラル協会が共同で開発した「ラピスラズリ」のキャンバスを使用したハンドバッグ2種も受注販売されています。橋本先生に石の絵具制作キットについてコメントをいただきました。

＊　＊　＊

日本画岩絵具の研究からはじまって、自然から直接得る顔料のたのしさを広げようと思い制作の傍ら活動しています。岩絵具などを私的に作る場合、量によっては、さまざまな機器が必要になり、一般の方、小中学校の美術教育などでは扱いにくいものです。それらを考える中で浮かんだのが、今回、紹介させていただく「石の絵具」「磨彩」絵具です。墨を磨るような要領で手軽に水彩などの絵具がつくりだせ、自然の色を楽しめます。「顔料の歴史」「絵具の構造」といった授業の教材として使うこともできます。また、工夫次第で、みなさんの傍らにある石も砂も土も筆で塗れる絵具になります。絵手紙など小作品だけでなく小箱に塗るなど多くの応用が可能です。
様々な場面で粉砕からなる一番自然な色材・近代以前の顔料の復活を試みています。製造には、現代の先端技術の恩恵も受けますが見て触れて、その色を思うときふしぎな安らぎを感じます。

（芸術学部絵画学科日本画専攻教授　橋本　信）

＊石の絵具　1,890円（税込）送料別途
<問い合わせ：東京サイエンス・電話03-3350-6745>
＊ラピスハンドバッグ
バスケットタイプ58,000円（税込）
ショルダータイプ29,800円（税込）
<問い合わせ：東京国際ミネラル協会・電話03-3342-9693>

NEWS・2 「多彩な響き　大村コレクションにみる女子美卒業生展」報告

社団法人北里研究所所長で天然有機化合物分野の世界的科学者、女子美術大学名誉理事長である大村智氏は、幅広い美術品の収集家としても知られています。1997年女子美術大学の理事長に就任したことをきっかけに、女子美卒業生の作品を重点的に蒐集、大きなコレクションができました。このコレクションを「多彩な響き」のタイトルのもと、2002年の女子美アートミュージアムを皮切りに、各地の同窓会支部と連携して巡回展を開催しています。
昨年は山口支部により周南市美術博物館で「多彩な響き　大村コレクションにみる女子美卒業生展」が開催されました。文化勲章受章者片岡球子（日本画）、大久保婦久子（皮革造形）、文化功労者郷倉和子（日本画）、三岸節子（洋画）をはじめ、堀文子、丸木俊、鏡面の抽象造形彫刻の多田美波等々、戦前より現在まで美術界で活躍してきた多彩な卒業生作家の作品74点が展示されました。日本における女性による芸術の歴史を垣間見ることのできる貴重な展覧会として多くの鑑賞者が訪れました。女子美術大学の存在を広く知ってもらう効果もあり、大成功を収めた展覧会でした。
同時開催の山口支部展とワークショップも支部の会員の方々の力が入り好評でした。

（美術資料センター）

「多彩な響き　大村コレクションにみる女子美卒業生展」
同時開催：「女子美術大学同窓会山口支部展 <いき >」
会期：2005年11月11日㈮～11月20日㈰
会場：周南市美術博物館（山口県）
主催：「多彩な響き」実行委員会
共催：女子美術大学同窓会山口支部　女子美術大学同窓会　女子美術大学
協力：社団法人北里研究所　女子美術大学同窓会岡山・山陰・広島支部
後援：山口県　山口県教育委員会　KRY山口放送　周南市教育委員会　周南市文化振興財団　下松市教育委員会光市教育委員会　読売新聞西部本社

NEWS・3 欧文活字を所蔵

昨年より制定された「文字活字文化の日」（10月27日）と軌を一にして、本学では「欧文活字」と呼ばれるアルファベットの活字書体を、多数収蔵いたしました。
欧文活字の手組を行っていた老舗活版印刷所の店主が高齢のため引退され、本学でその活字書体を引き取ることになったもので、同印刷所の名高い活字は<印刷博物館>にも所蔵されています。
この中には、EU加盟の諸国を結びつけている高速道路やわが国の名神・東名、また地下鉄などの交通機関の標識など、多くの屋外使用の文字や印刷物に使用されている「ヘルベチカ体」<ドイツD.Stempel社製>（写真参照）、現在、西欧最高のカリグラファーとして尊敬されているヘルマン・ツァップの設計書体の「パラチノ体」や「オプチマ体」、米国産の書体「ニュース・ゴシック」「アメリカーナ」など、「サンセリフ体」、「ローマン体」、手書きのカリグラフィをベースにした「スクリプト体」などに分類される多くの活字書体、またこれらの活字を鋳造する「母型」が含まれます。いずれも、鋳造所などの出自が明確な歴史的な書体群です。その他にも活版印刷の道具である「込め物・クワタ類」「植字台」が含まれています。
本学では<活字をめぐる文化財保存活動>の一つとして、これら金属活字と活版印刷の道具類を保存し、造形教育の資料として活用するとともに、未来につながる貴重な文化財として広く役立てたいと考えています。これらの文化財・教育的資料は森啓教授に監修いただき、分類整理後に公開を予定していますが、現在、その一部を先行して本学相模原図書館1階に展示し、ご覧いただいています。

（図書情報センター　川上　勇）

独ステンベル社「ヘルベチカ」60ポイントの鉛活字

展示風景　植字台

NEWS・4 『希望の美術・協働の夢　北川フラムの40年　1965−2004』

本学芸術学部芸術学科の北川フラム先生が『希望の美術・協働の夢　北川フラムの40年1965−2004』という本を出版されました。アートフロントギャラリー代表を務め、アートディレクターやメディエーター（ある場所で何かやりたいという人とアーティストを結ぶ仕事）として世界的に活躍してきた北川先生。「アパルトヘイト否！国際美術展」や「アントニオ・ガウディ展」（これらの仕事によりフランス共和国政府より芸術文化勲章を受章）のプロデュースや、立川駅北口再開発「ファーレ立川」（日本都市計画学会設計賞受賞）の総合プランニング、本学の学生も数多く参加しているイベント「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ」（ふるさとイベント大賞、東京ファッション賞を受賞）の総合ディレクターとして有名です。この本の中ではこれらを含む先生の数々のアートディレクション、コーディネート、文筆業、出版業など、40年間に渡る仕事の全貌が紹介されています。アートコミュニケーションを学ぶ人には必読の書です。

北川フラム著　角川学芸出版

Festival・女子美祭2005 ＜杉並キャンパス＞

2005年10月28日から30日、杉並・相模原の両キャンパスで開催した女子美祭。今年は3日間で杉並キャンパスに9892名、相模原キャンパスに12481名の来場者がありました。相模原キャンパスの今年のテーマは「艶」、杉並キャンパスのテーマは「セレブ FESTA」。相模原キャンパスのゲストは千秋さん、浅葉克己さん、獄本野ばらさん、そして本学卒業生でハローキティのデザイナーの山口裕子さん。杉並キャンパスのゲストはみうらじゅんさんで、講演会は大盛況のうち終わりました。

＜相模原キャンパス＞

ハローキティと女子美がコラボ！

女子美祭にて、「HELLO KITTY」と「女子美」がコラボレーションしたクラッチバッグを作製、販売しました。1日につき150個ずつ、3日間で合計450個の限定販売でしたが、様々な場所で広報した成果もあり、3日間で450個全てが完売しました。
クラッチバッグの作製は、女子美祭のHELLO KITTYプロジェクトのひとつとして企画され、女子美祭実行委員の学生が株式会社サンリオをはじめとする、各関係企業と交渉を重ねて実現しました。ひとつの商品が企画され、製造、販売されていく過程を実際に体験できたことは、貴重な経験になったに違いありません。

Interview・2 OGインタビュー 作家 石井礼子さん

2005年9月17日から11月23日まで、平塚市美術館（神奈川県平塚市）にて『石井礼子展 ―わたしのまわり―』が開催されました。本学OGの新進作家、石井礼子さんに展覧会終了後、お話を伺いました。

子どもの視点がオモシロイ

―大きな展覧会を終了された率直なご感想は？

石井：まずは多くの方々に感謝しています。また、今回、たくさんの子どもたちが私の展覧会を観てくれたことがとても嬉しかったです。その会場で感じたことは“子どもの視点がオモシロイ”ということ。会場で子どもの鑑賞方法を観察していると、鑑賞方法が様々なんです。中には、私の絵を背に立ち、股の下から逆さに私の絵を観ている子や、会場内の全ての私の絵の中にいる「猫」の数を数えて「388匹いたよ！」と教えてくれる子など…。とても新鮮でした。

使用している顔料は墨、そして描く道具は割り箸

―作品を制作するための道具は？

石井：その香りが心地よいので、顔料は墨を使ってます。また、描く道具は、筆ではなく、割り箸を使っています。子どもの頃から割り箸で描いていたので、ごく自然に割り箸で描くようになりました。割り箸は削って自分で全て作ります。尖ったもの、平べったいもの、先がほうきのように分かれたものなど…描きたい描写に応じて作ります。まさに自由自在（笑）

―石井さんの作品は見るからに膨大な時間がかかっていそうですが、大体一つの作品を完成させるのにどのくらいかかるのでしょうか？

石井：大体1日に6～7時間は描いています。それでも作品の大きさにもよりますが、1枚仕上げるのに半年くらいはかかります。

―相当疲れますよね？今日は描きたくないな…と思う日もあるのでしょうか？

石井：描きたくないと思う日はありませんね。とにかく描きたいことがたくさんあるし、楽しい仕事ですから。確かに、非常に疲れる仕事です。でも不思議と描いているときは全く疲れないんですよ。ただ…描き終わると、正直、どーっと疲れがっ（笑）

―作品の制作過程についてお聞かせください。

石井：自分の作品の描き方についての説明によく使う表現ですが「編み物を編み続ける作業」とよく似ている気がします。どんな大きな作品についても小さな片隅からひとつひとつ描き続けていき、結果として大きなものが出来上がっていく訳です。そうした作業は他の例としては、以前聞いたことのある写経などにも共通しているように思えます。

―作品のコンセプト、テーマなどについてお聞かせください。

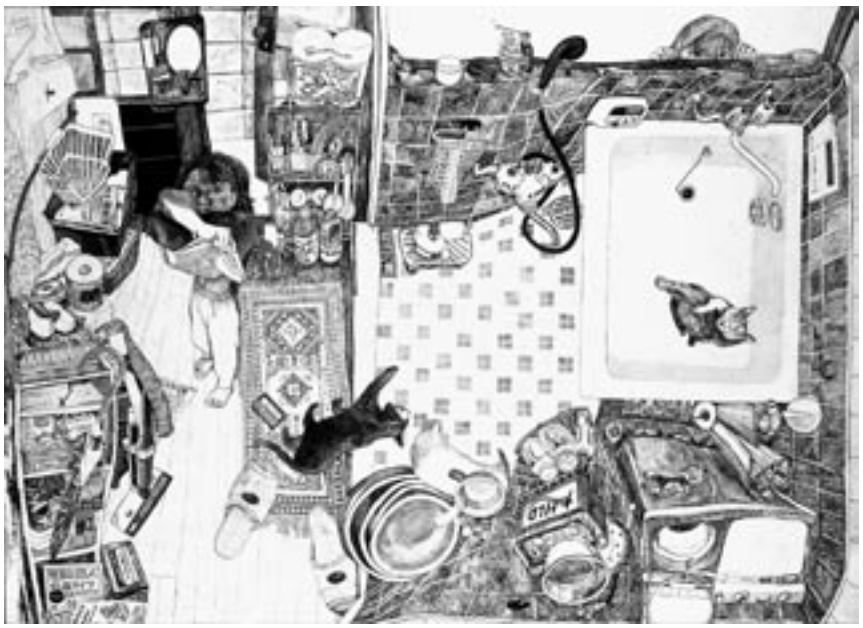
石井：作品のテーマは一言で言うと『私の周囲（まわり）』。ごくあたりまえの日常生活を執拗に描いてゆくことで「自分自身の存在」を明らかにしたいと思っています。その「自分自身の存在」を確認する方法としてはごく普通にだれもが自分を記録するようにごく自然に日記を絶やさずつけ続けるということ。ですから、初めから人の目にアピールしたいということ以前に、自分の記録を作り続けてきた結果がひとつの作品になっているといった感じです。また、制作中“子どもの頃から絵を描くことが本当に大好きな自分”を改めて発見したり、テーマや作品の作り方も、どこまでも自分流でわがままを通し続けていく中で、自然に生まれてくる“不思議な力”を感じたりもしています。

猫は私自身なんです。

―石井さんの作品は物を観る視点（眼）が多方向にあり、本当に面白い。まさに石井ワールドですね。

石井：私の絵には猫がたくさん描かれていますが、猫っていろんな体の形をするので面白いなぁと思います。実は、猫は私自身なんです。猫って、箪笥の上に登って高い所から下を観たり、物の隙間に入ってその隙間から覗いたりしますよね…。私はその猫の眼でみえる世界を描いているんです。なので、よく「いしいねーこ？」って言われたりします。私は子どもの頃から物を観察することが非常に好きでしたね。水槽の中の金魚をじーっと眺め、金魚のするあの長～い糞を「面白いなぁー」と思ったり（笑）

「私の周囲（おなかすいた）」2004年（2005年加筆）墨・麻紙　153×211.5㎝



「私の周囲（お風呂場）」1998年 墨・麻紙　152×211.5㎝

私の作品から生まれる意外な反応!?

石井：私の絵の中にはたくさんの物が描かれていますが、先日も、近所の工務店の方が私の展覧会を観てくださり「ありがとう！うちの店の宣伝をしてくれて！」と非常に喜んでおられました。基本的に私の描く物は、私の身のまわりにある物ですから、自然に商品や広告チラシや店名の入ったカレンダーなども絵の中に描かれてしまうんですよね。なので、おかしいのが、うちに来るとお店の人が、今度はうちの名前や製品も描いてもらおうと、さりげなく色々なものを置いていくんですよ。店名や電話番号が入ったタオルをわざと家の中に置いていかれたり!?また近所のお母さんからは、今度はうちの子どもを絵の中に描いてほしいと言われたりとか（笑）何だか、とても面白いんですよね。

「石井礼子展－わたしのまわり－」展覧会図録より

子どものようにかわいい。

一絵の中に描かれた店主の方などから絵を譲ってほしいとは言われませんか？

石井：そうなんです。ありがたいことにそういった依頼はあります。今回の展覧会を観た藤沢の家電製品店の方から譲ってほしいといわれました。ただ、私は小さな頃から、物を捨てられない性格。また、様々な出来事を全て自分の記憶に留めておきたいと思ってしまうんです。私は身のまわりの物や出来事を絵の中に描いていて、いわば日記のようなものなので、描いた絵はどれも“子どものようにかわいい”んです。だから、作品は手放せないんですよ…。

バスがなかなか来ない！

一女子美での6年間で特に印象に残っていることはありますか？

石井：とにかく女子美は楽しかったですね。毎日楽しいことだらけでした。中でも印象に残っている（嫌な思い出!?）のは、バスがなかなか来ない！ことですかね（笑）雨の日などバスが待てど暮らせど来ないわ、乗ったら乗ったで、道が大渋滞し、相模大野まで延々とバスに揺られ…もう大変でした。そういえば、私、一度、相模大野まで歩こうとチャレンジしたことがあるんですよ。私の提案ではなく、友達に誘われたんですが、私も「冒険みたいで、何だか楽しいことがありそうだな！」と思い「いいよ！」と付き合う事にしたんですが…しかし、大学から30分位歩いた、ニワトリ銀座（養鶏所）の辺りで、何と道に迷い（しかも3時間もあの辺りをウロウロと）おまけにそのうち友達と大喧嘩になってしまい…結局、バス通りまで戻り、バスに乗って帰ったという散々な思い出が…（大爆笑）

ずっと自分にこだわりながら、ゆっくりと進んでいきたい。

一最後に石井さんの今後の制作活動についてお聞かせください。

石井：こうして毎日、毎日、何時間も描くことにより（かなりの苦痛を伴うことも多いですが）私としては自分の生きている現実をたしかめ、味わっているのだと思います。これからも、ずっと自分にこだわりながら、ゆっくりと進んでいきたいと思ってます。

（インタビュー・文　広報課　三ツ木知昭）

石井礼子（いしい　れいこ）　略歴

1974　東京都生まれ（神奈川県藤沢市在住）
1985　毎日新聞主催パン食普及協会主宰のコンクール
　　秀作賞受賞（ハワイに招待される）
1988　住まいの絵画コンテスト（朝日新聞社主催）
　　建設大臣賞（最高賞）受賞
1990　年賀状版画コンクール　特別賞・特定郵便局長賞受賞
1993　女子美術大学絵画科洋画専攻入学
1994　第44回藤沢市展　市議会議長賞受賞（第47回には協会賞受賞）
1996　第60回新制作展　初入選
　　（以後、第63回まで連続して入選）
1997　女子美術大学卒業。卒業制作賞受賞
　　女子美術大学大学院美術研究科
　　美術専攻洋画領域入学
　　㈶佐藤国際文化育英財団奨学生に選出
1998　ロータリアン賞候補美術展　関内ギャラリー賞受賞
　　藤沢市美術協会会員
1999　女子美術大学大学院修了
2000　第64回新制作展　新作家賞受賞（以後、第67回まで連続して同賞受賞）
2001　神奈川女流美術家協会会員
　　女子美制作研究奨励賞　受賞
2004　第23回損保ジャパン美術財団　選抜奨励展　出品
　　新制作展会員
2005　石井礼子展（平塚市美術館、
　　2005年9月17日－11月23日）
　　その他、個展、展覧会への出品多数

JAM・1 女子美アートミュージアム展覧会情報

展覧会開催報告
＜JAM＞

「Ten Colors 活躍する若手女子美卒業生展」

女子美出身若手クリエイターを特集し、その活動と作品を紹介する展覧会でした。23名と1組、24の出品作家たちの作品はまさに十人十色で、現代アートと様々なデザインの世界が美術館いっぱいに展開されました。多くの人に馴染み深いペットボトル飲料、リカちゃん人形、ぬいぐるみ、文具、アクセサリー、CG デザイン、工業デザイン、イラストレーション、ガラス工芸、創作人形といった作品のほかに、インテリアスタイリストや児童絵画研究・指導者として活躍する卒業生の仕事も見ることができました。
柔軟で自由な発想と想像力を持ち、多彩なフィールドで創作活動をする卒業生の姿は、現役学生にはよりよい将来の展望を描く指針となり、一般の方々には社会の創造的活動の一端を担ってきた女子美卒業生たちの素晴らしい成果を確認させるものでした。
ロビーでは、学生企画による学生作品展「ビビデバビデブー！」を同時開催しました。

（2005年9月14日－10月23日）

「第27回造形さがみ風っ子展」

相模原市主催で、JAMを会場とする屋内展も今回で3回目です。市内小・中学校の生徒作品が色とりどりに展示され、楽しい空間が構成されました。会期5日間で4200名以上の入館者を数え、女子美祭とも重なって、女子美を地域に広めるよい機会となりました。

（2005年10月27日－10月31日）

＜ガレリア ニケ＞

「女子美アートミュージアム収蔵作品展」

女子美美術館収蔵作品賞を受賞した平成16年度女子美術大学卒業・修了制作作品を紹介しました。洋画、日本画、工芸、デザイン各学科に、今年度より立体アート、メディアアート、ファッション造形の新設3学科が加わり、さらに多彩な内容の展覧会となりました。

（2005年10月17日－10月30日）

「ガレリア ニケ　中学生・高校生美術展」

（2005年9月24日－10月8日）

「日中国際交流記念『友好の美 展』」

（2005年11月14日－11月26日）

この2つの展覧会は、付属中学校高等学校の企画・主催による展覧会です。前者は、毎年恒例のもので、首都圏の中高生のみならず、韓国や米国の生徒作品も展示され国際色豊かな展覧会でした。後者は、日中国際交流の成果として先に中国で女子美付属生の展覧会があり、今回は日本で中国の生徒の作品を展示しました。力の入った作品が多く見ごたえのある展覧会でした。

ガレリアニケ 中学生･高校生美術展

友好の美 展

展覧会案内
＜JAM＞

「スモール&ビューティフル：スイス・デザインの現在」

スイスは、美しい自然を生かした観光立国であるとともに優れたデザインと技術が根づいており、道路、橋梁、景観、建築などのインフラの上に、細やかな生活デザインが展開しています。さらにはパッケージやグラフィック・デザインに至るまで、徹底してモダニズムを追及し、今やスイスは国土のいたるところで雄大な風景の中にシャープなモダンデザインが展開する、世界でも稀な国となっています。
本展覧会は、こうしたスイスの現代デザインを広く紹介するために企画されました。この機会に「小さく豊かに生きる知恵」を実践するスイスの現代デザインに触れていただければ幸いです。

会期：2005年12月7日㈬～2006年2月20日㈪
休館：12月24日～1月9日
会場：女子美アートミュージアム（相模原キャンパス内）

「平成17年度 女子美術大学大学院 修了制作作品展」

平成18年3月に大学院を修了する実技系学生の修了制作作品を展示します。絵画、彫刻、工芸、デザイン、映像、ファッション等内容は多種多彩です。女子美術大学の教育成果の集大成を紹介する展覧会です。

会期：2006年3月3日㈮～3月21日㈫･祝
会場：女子美アートミュージアム（相模原キャンパス内）

（美術資料センター　長谷川なほみ）

Topics ・2 バーミンガム・アート・デザイン学院からの交換留学生

今回で3回目となる英国バーミンガム・アート・デザイン学院（BIAD）短期外国人留学生受入れプログラムが、2005年6月27日から7月15日までの3週間実施されました。留学生として来学したのは、ニコラ・ピューさん、クリスティーナ・バーンズさん、リディア・ウィルクスさんの3名です。

ニコラさんは立体アート学科で2年次の授業科目「素材実習B」に参加しました。紙コースでは切り刻んだ雑誌などを再生し、学生と共同で作品を制作しました。木コースではブナコを使用して作った器に金属の破片を突き刺した作品を制作しました。日本の伝統技術などを学び、自国で学んだ技術と融合させながら学生とともに様々なアイディアを出し合い積極的に制作活動を行いました。クリスティーナさんとリディアさんはファッション造形学科3年次授業科目「ファッション造形ⅠB」の中の、主に染色と織のクラスに参加しました。染色ではいろいろな技法を用いたサンプル作りをし、織では技術を学ぶとともに課題制作にも取り組みました。

3名とも日本語が話せませんでしたが、先生や学生とはお互い英語やごく簡単な日本語でコミュニケーションを取りながら授業が行われました。送別会では浴衣を着て流しそうめんをしたり、イギリスの料理を振舞ったりなど多様な異文化交流の機会をもたらしてくれました。

※本学ＨＰでも写真を公開しています。

（国際交流センター　平井 順子）

クリスティーナ・バーンズさん
（BIAD ファッション・テキスタイル・商業デザイン学科）

ニコラ・ピューさん（BIAD 美術デザイン学科）

初めて女子美に来た日に、私は立体アート学科の2005年3月の卒業制作作品集をもらいました。最後のページに載っている学生の集合写真を見て、「彼女たちが私と同じ立体芸術を専攻している学生か」と思ったことを覚えています。その写真の中に知っている人はいませんでしたが、作業靴とオーバーオールと彼女たちの笑顔はなぜか親しみと懐かしさを感じました。

3週間後、私は同じ場所に座り同じ写真を見ていました。しかし今度は、その写真の中の何人かの名前が言えて、作品集に載っているいくつかの作品がどのように制作されたのかも分かり、さらにはイギリスへ帰ることを考えなければなりませんでした。

言うまでもなく女子美で過ごした中で一番の出来事は出会った素晴らしい人々です。私にスタジオやギャラリーを見せてくれたり、お祭や神社に連れて行ってくれた方々、英語やフランス語、身ぶりや絵を使ってコミュニケーションを取ってくれた方々、学内や相模大野駅で私を見かけた時、立ち止まって手を振ったりあいさつをしてくれたりした方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

リディア・ウィルクスさん（BIAD ファッション・テキスタイル・商業デザイン学科）

言葉も話せないような全く新しい国に来て、家族と離れてそこでしばらくの間過ごすことになり、女子美に来た日は圧倒されました。初日に他の留学生たちと一緒にオリエンテーションを受けていた時の気持ちは、まさに驚きとしか言いようがありません。設備は立派で、様々なスタジオで学生たちが各自制作をしていました。午後になって先生方に紹介された後、早速授業に参加しました。まず染色について様々な技術を学びました。特に染色の‘絞り’は日本の伝統的な技術なのでとても楽しめました。その後の期間はほとんど織の教室で作業をしましたが、学生たちはいつも私がそこで何をしているかのぞいて声をかけてくれていました。翌週はダンスのクラスに参加しましたが、体の動きをファッションの分野に置き換えて考えることができるというのは大変興味深いことでした。先生方は素晴らしく、言葉が通じないにも関わらず一生懸命コミュニケーションを取りながら新しいことを教えて下さいました。たくさんの学生達が、私が環境に慣れるように助けてくれました。この留学プログラムで女子美に来られたことはとても勉強になり、はっとさせられることが多く、楽しく、何よりもこれから先の人生において忘れられない大切な経験になりました。

Series・シリーズ　卒業生の美術館②　一宮市三岸節子記念美術館

世界的に有名な洋画家であり本学の卒業生である三岸節子先生の作品を集めた「一宮市三岸節子記念美術館」は先生の生家である愛知県一宮市（旧起町）にあります。
一般に数少ない個人名のついたこの美術館。どんな経緯があって造られたのか、学芸員の伊藤和彦さんに伺いました。
「三岸先生は12歳で名古屋の高等女学校で寄宿舎生活をしていますし、16歳で上京していますから、三岸先生が起町で過ごした期間は短いんです。それでもともとは三岸先生は地元の人にはあまりなじみのある画家とはいえませんでした。」
ところが、1986年秋には勲三等宝冠章を受章。そして1988年には尾西市の名誉市民に推挙され、1989年には尾西市制35周年記念名誉市民三岸節子新作展が尾西市歴史民俗資料館で開催されました。
「これには1週間で4000人もの人がやってきました。このとき三岸先生が講演をされたのですが、この講演を聴いて感銘を受けた人々から『節子記念美術館建設を』との声があがり、県内外から約3900人の署名が集まったんです。このこともひとつの要因となりました。」
美術館の屋根は、かつてこの敷地内にあった織物工場を模してデザインされた鋸屋根になっています。また美術館の中央には三岸先生の好んだヴェネチアの運河をイメージした水路が通っており、非常にユニークなつくりです。幼い頃から先天性股関節脱臼を患っていた三岸先生は大きな旧家の集まりごとの際には世間体を気にした家族によって敷地内の土蔵に追いやられていたと言われています。美術館の常設展示室の隣には現存するこの土蔵を活かして、三岸先生のアトリエを再現した土蔵展示室があります。ここには三岸先生の唯一の趣味であったという着物や、アトリエで使用していた画材や日用品、三岸先生の花の絵の中に出てくる花瓶も展示されています。
地元の大地主で毛織物工場を経営していた三岸先生の実家である吉田家は、1920年、三岸先生が15歳のときに、第一次世界大戦後の恐慌のあおりを受けて倒産してしまいます。このときに三岸先生は「一家の苦しみを何者かになってとりかえそう。」と強く決意し、また、「絵を描くことで妹や両親をなぐさめたい。」という想いがあって美術の道に進むことを決めたそうです。
夫である三岸好太郎氏の死後は、女性画家たちとともに「女艸会」「七彩会」を結成し、男性中心の画壇での女性の地位向上を目指した活動もおこなっておられました。1994年には女性洋画家として初の文化功労者になられ、94歳で生涯を終えられましたが、その数週間前まで絵を描き続けていたと言われています。見る人を圧倒せずにはいない、描くことへの凄まじいまでの想いが込められた数々の作品を、ぜひ先生の生誕の地でご鑑賞ください。

（広報課　林 亜紀子）

○交通案内
ＪＲ尾張一宮駅・名鉄一宮駅からバスターミナル②番のりば
「起（おこし）」行で12分「起工高・三岸美術館前」下車　徒歩1分
一宮市三岸節子記念美術館ウェブサイト
http://s-migishi.com·

細い運河　1974年　92.0×73.0（30F）
材質：油彩、キャンバス

NEWS・5　学生デザインのキャラクターがエコバッグに

相模原市の相原二本松商栄会が製作して昨年9月に店舗での配布がおこなわれたエコバッグ「マツボー買物バック」。商店街で買物をした際に配られるビニール袋や包装紙の軽減と消費者の利便性向上を目的に、相模原市の補助金を利用して製作されたものです。このバッグのデザインのキャラクターになっている「マツボー」は本学短大造形学科デザインコース卒業生の戸井原仁美さんが在学中にデザインしたものです。現在は販売促進グッズ制作が主な業務の会社にデザイナーとして勤務しているという戸井原さんにコメントをいただきました。
「はじめは有志ということで、気軽に参加しましたが、実際にプロジェクトが始まってみると、プレゼンあり、特色の色指定をしたりと実に実践的な活動でした。はや2年と言う月日が経ちましたが、このように現在も相原・二本松地域の皆様に、マツボーを可愛がっていただき大変うれしく思います。現在は、販売促進グッズ制作に関わっており、このプロジェクトの経験が大いに役立っている毎日です。（今まさに某食品会社のレジバッグを製作中です…！）コンビニ・スーパーなどで皆さんのお目に触れていることもあるかも…しれません。」

Topics ③ アート・セミナーに行こう！ オープンカレッジセンター

本学で、「美術人」の育成を目標に、毎年開講している「アート・セミナー」。杉並・相模原の両キャンパスで開講しており男女を問わず受講が可能です。実技講座を中心に、ほとんどが20名程度のコンパクトな講座です。「初心者講座」が多数、「親子講座」「小学生講座」などもあります。開講期間の長い講座、短い講座、平日の講座、土・日に開講する講座など期間も様々です。2005年度は合計93講座を開設。一般の方69%、卒業生20%、在学生11%の割合で約1700件のお申し込みをいただき、好評のうちに終了しました。2006年の開講講座はウェブサイトなどで5月連休明けにお知らせする予定です。ご期待下さい。

（オープンカレッジセンター　藤沢 共子）

http://www.joshibi.ac.jp/occ
ウェブサイトは5月に新データに更新予定。

色板ガラスで器をつくる

Mac講座

すべすべ石で彫刻

人体着彩

銅版画（エッチング）

親子講座－夏の思い出の絵本作り

ボタニカルアート

NEWS ⑥ “ロダン体操”ってご存じですか？

みなさん「ロダン体操」ってご存じですか？この「ロダン体操」とは、「考える人」などで有名な彫刻家ロダンの彫刻のポーズを採り入れた体操です。この体操を考案したのは、本学大学院美術研究科修士課程洋画研究領域を修了し、現在もアーティストとして幅広く活躍をしておられる高橋唐子さん（静岡県浜松市出身。現在本学芸術学部絵画学科洋画専攻専任助手）です。昨年10月1日、静岡県立美術館（静岡市）で開催された「静岡 NewArt『あなたの居場所』」展の関連イベントとして、同美術館のロダン館にて、このロダン体操が行われました。当日は高橋さんと女子美時代の同級生がインストラクター役を務め、高橋さんの元気な掛け声と音楽にあわせ、同美術館を訪れた120名近くの老若男女がロダン体操を体験しました。

高橋さんのコメント：「ロダン体操」は2002年に静岡で開催された国体の、スポーツ芸術競技として制作しました。その後、美術館ボランティアさんから広がり、静岡で育ててもらったこの体操は今も活躍しています。人と関わり発想すること、それが私の制作の原点です。多くの方々に支えられ出来上がったこの作品は、私個人のものではありません。これから先、様々な手が加わり形を変え、地域社会に還元されることを願っています。体操をきっかけにロダンを知り、そして少しでも美術に興味を持ってもらえたなら、私は本当に嬉しく思います。

静岡県立美術館ウェブサイト
http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/

Topics ④ フィンランド・フランス美術大学見聞録

大学・短期大学部の国際交流委員会では2005年10月25日から同11月4日にかけてフィンランドとフランスの美術大学訪問視察を実施しました。日本とは異なる美術・デザイン教育の環境や方法など、現地の様子をお伝えします。

リヨン国立美術学校　校舎入口

エブテク・アート・デザイン学院（フィンランド）

創立1984年。エブテク応用科学大学の一学部であり、450名の学生が在籍しています。学士課程（4年間）のみを設置し、3学科（メディア学科、デザイン学科、保存修復学科）10コース（グラフィックデザイン、3D視覚表現、テキスタイルデザイン、ファッションデザイン、立体芸術修復、家具修復、イーゼル絵画修復、紙修復、テキスタイル修復、インテリア修復）で構成されています。保存修復学科は国内で最も充実していると言われ、4年に一度しか学生を募集しません。一般にフィンランド

エブテク･アート･デザイン学院
彫像を修復する学生

の高等美術・デザイン教育は卒業後の就職での実践性を強く意識していますが、学院も産業界とのつながりや就職との直結性に重きを置いた教育方針（授業科目「インターンシップ」・「ビジネス原論」・「ビジネス

エブテク･アート･デザイン学院
学生作品（織）

プラニング」・「成功するマーケティング」の必修化など）をとっています。学生の卒業制作作品を企業が評価し、商品化して市場に流通させることも頻繁にあります。
学院が位置するヴァンターは国内第4の都市です。ヘルシンキ中央駅から鉄道で15分の距離にあり、隣接する市とともにヘルシンキ首都圏を構成しています。

ヘルシンキ美術デザイン大学（フィンランド）

創立1871年。学士、修士、博士の各課程に計1,700名の学生が在籍しています。修士課程の学生数が圧倒的に多く、北欧最大の美術・デザイン系大学として知られています。4学科（モーションピクチャー・テレビ・プロダクション学科、デザイン学科、美術教育学科、視覚文化学科）10コース（映像･テレビ、プロダクション、陶･ガラスデザイン、産業・戦略デザイン、室内建築・家具デザイン・空間デザイン、テキスタイルアートデザイン､ファッション･服飾デザイン、美術教育、グラフィックデザイン、写真）を設置し、学生は3年間で学士、5年間で修士の学位を取得します。独立機関として「デザイン改革センター」と呼ばれる研究所を擁しており、行動戦略として、①大学内部へのサービス提供、②

ヘルシンキ美術デザイン大学
学生作品（陶）

大学外部へのサービス提供、③戦略的研究と開発の3点を掲げています。
フィンランド南端に位置する首都ヘルシンキは街の規模が小さく、2日もあれば中心エリアを徒歩で回れます。国全体で英語教育が徹底しており、どこに行っても英語が通用する環境です。

リヨン国立美術学校　（フランス）

創立1756年。現在の学生数は300名ですが、2007年1月に他の美術学校と合併してキャンパスを全面移転し、グラフィックデザイン、インテリアデザイン、テキスタイルデザインの領域を増設する予定です。学生は3年間で学士課程修了相当、5年間で修士課程修了相当の国家資格（ディプロム）を取得します。1年目はファウンデーションコースと呼ばれ、アートとデザインの両分野で多くの実技を経験して基礎を修得します。2年目からアートコースとデザインコースに分かれますが、各コース内では定められたカリキュラムはなく、自己の

リヨン国立美術学校　教室風景

関心と制作方針に従って柔軟に履修科目を選んでいきます。この点は日本の美術大学との最大の違いだと言えるでしょう。専任教員の専攻分野が教育研究領域となり、絵画、版画、彫刻、写真、デザイン、コンピュータグラフィックス、映像、建築、シーノグラフィ、コレオグラフィ、インスタレーション、美術史、色彩などを学習できます。学校は表現の多様性を重視しており、学生が相互に触発されることを期待しています。見学したある教室では絵画を制作している学生の隣に立体アートや写真の学生が個人スペースを持っており、一つの教室に様々なメディアが混在していました。
フランス南東部に位置するリヨンは国内第3の都市として栄え、テキスタイル産業が盛んなことで有名です。旧市街地の一角はユネスコ世界遺産に登録されており、移転先の新キャンパスはこれを臨む地にあります。

（国際交流センター　下田 明）

Topics ・5 日本と中国を繋いだ「友好の美 展」

「『友好の美 展』としてこのような展覧会が実現できましたことは、感慨無量の思いがあります。日本と中国は、政治的には波風が立っているような、時としてそういう時期もありますが、私たちは美しいものを愛し、美しいものを求めるという共通の基盤に立ち、お互いの長所を認め、尊敬するところを見つけ合い、両国の友好関係を堅実に築いて行きたいと願っています。」

11月14日、入江観校長の挨拶で始まった開幕式。日本中国文化交流協会代表理事の栗原小巻氏、中華人民共和国駐日本国大使館からは文化担当の欧陽安三等書記官、並びに杉並区教育長の納冨善朗氏らの来賓挨拶が続き、立石雅夫理事長・学長をはじめとする約100名が列席する中、厳かに行われました。

「15年前に初めて中央美術学院へ訪れたときに、ひた向きに制作する彼らの姿に感銘を受け、いつの日か女子美で中国の学生たちの作品を紹介したいと思っていました。」と語る入江校長を団長に、2004年の秋、私たち女子美大付属の訪中団メンバー10名（教師5名、生徒5名）は日本中国文化交流協会常任理事事務局長の中野暁氏の協力を得て、248点の作品とともに海を渡り、中央美術学院美術館において「友好の美 展」を開催しました。

そして、2005年。「友好の美 展」はガレリア ニケにホームグラウンドを移し、中央美術学院附属中等美術学校（以下、附中と省略）副校長の賈暁燕先生率いる訪日団11名（教師6名、生徒5名）と作品280点をお迎えしました。

日本画に通ずる中国画、書道、油彩。30日間、内モンゴルへスケッチ旅行に出かけて描き続けるという速写（スケッチ）、見事なデッサン群、色彩と呼ばれているガッシュで描かれた水彩画、そしてデザイン作品。目を見張るばかりの作品がガレリア ニケの壁を埋め尽くしました。優秀な生徒が中国中から集まるエリート校と知りながらも、一堂に会した作品を前にすると、息を飲み、心が動かされました。

「未来を築いていく若いみなさんの作品を通して伝えられる祈り－創造していく過程での精神性－に耳を傾け、みなさんの作品を心の目で鑑賞したいと思っています。」と、来賓挨拶で栗原小巻氏によって語られましたが、かつて入江校長が感動した彼らのひた向きさというのは、制作を通じて成長し自己形成していく彼らの精神そのものなのではないでしょうか。作品から沸き上がる凛とした強さを感じました。

1000名に上る私たちの女子美大付属生が、何らかの形でこの国際交流に参加できるように、また、この国際交流を通じて国際性を身に付け、国際理解のきっかけとなるようにと、一昨年5月から中国語の特別講座を開設したり、チャイニーズ・ミュージック・アワーや中国映画上映会などを行ってきました。

訪日団が訪れた昨年は、日中交流推進係を生徒から募り、担当教師と力を合わせて準備に励み、学校中の志気を仰いできました。両校の生徒たちが、最も触れられる「生徒座談会」が開幕式の午後に行われました。附中を代表する5名のみなさんが、一人ひとり自作のことや学校生活について語ってくださり、後半の自由交流のときにはプレゼントや住所交換をするので大きな輪があちらこちらにできました。

翌日の体育館で催された「全校講演会」では、専門研究副主任の賀羽先生がこれまでの附中を代表する優秀作品や学校生活の記録を映像で紹介してくださいました。附中生の素晴らしい腕前や美術に対する姿勢がよくわかり、質疑応答の時間では、美術を学ぶ者同志、積極的な質問が投げかけられ、交流の1シーンにふさわしい充実した時間を過ごすことができました。

入江校長率いる7名の女子美チーム（教師3名、エスコート役に選ばれた女子美付属生4名）と訪日団11名で出かけた1泊2日の日光研修旅行では、華厳の滝、中禅寺湖、戦場ヶ原、東照宮を見学しました。女子美付属生と附中生は、すっかり打ち解け、晩秋の日光を満喫。訪日団のガイド役となったり、移動中には持参した作品ファイルを見せながら美術のこと、学校生活のこと、中国の流行りの音楽や映画のことと、高校生らしい話題に花を咲かせ、友好を深めました。

訪日団の滞在は、4泊5日の短い時間でしたが、私たちの心の中に気持ちの良い風が吹き抜けたようです。日中友好の種が確実に芽吹いたと思います。

この文化交流は、入江校長が私たちにくださった宝物です。昨年度から今年度へ。そして未来へ。「友好の美 展」が、名前の通り両校の友好を深め、日中の大きな架け橋となることを願います。

（付属高中 美術科教諭 遠山香苗）

NEWS・7 100周年記念大村文子基金

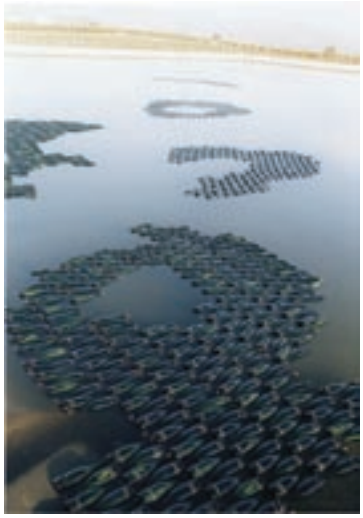
創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、平成11年に大村智名誉理事長夫妻からの寄付をもとに、文子令夫人のお名前をいただいて設立されました。この基金によって運営されている「女子美パリ賞」（第7回）、「女子美 制作・研究奨励賞」（第5回）、「女子美美術奨励賞（留学生対象）」（第4回）、そして本基金の目的のために功績のあった者、及び団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

○女子美パリ賞

鈴木（すずき） 綾子（あやこ）

大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域1年

鈴木 綾子さん 「滑走路のそばで」
194.0×162.0㎝ 油彩/カンヴァス 2004年



田口 一枝さん 「The Path To Hope」希望への道

○女子美 制作・研究奨励賞

井上（いのうえ） 由理子（ゆりこ）

昭和46年 3月 芸術学部絵画科卒業
平成 2年 6月 フランス国立社会科学高等研究院修了

田口（たぐち） 一枝（かずえ）

平成 9年 3月 芸術学部絵画科洋画専攻卒業
平成16年12月 スペイン バルセロナガラスセンターガラス造形修了

長谷川（はせがわ） ちか子（こ）

平成 8年 3月 大学院美術研究科修士課程美術専攻修了

井上 由理子さん

日本の近・現代彫刻界において指導的役割を果たした清水多嘉示。彼はエコール・ド・パリ全盛期だった1920年代のフランスで、彫刻界の巨匠ブールデル最後の門下生としてロダン以後の彫刻を学びます。本書は清水がパリで渾身の努力をもって制作に励んでいった様子やジャコメッティ、藤田などとの交流を含めた青春の日々、そして当時のフランスの美術界を詳述したものです。残された貴重な資料も含めた230点の写真も掲載。

長谷川 ちか子さん 「GIFT-白粉-国周2」
浮世絵＜1878明治時代＞
マウントにシルクスクリーンプリント／額装
w.36×d.44(㎝) 2004

○女子美美術奨励賞（留学生対象）

荘（そう） 雅淳（がじゅん）（台湾出身）

大学院美術研究科修士課程デザイン専攻 視覚造形領域2年

范（はん） 淳美（すうみ）（台湾出身）

芸術学部立体アート学科3年

林（りん） 千櫻（せんおう）（台湾出身）

短期大学部造形学科
デザインコース1年

○大村特別賞

佐藤（さとう） 敬子（けいこ）

昭和44年 3月
短期大学造形科彫塑教室卒業
平成3年より 佐藤肇氏(夫)と「アトリエ・エレマン・プレザン」共同主宰

【受賞理由】
「アトリエ・エレマン・プレザン」を主宰し、芸術による創作活動を通して、主にダウン症の人達が本来持っている豊かな感性と資質を引き出す環境造りと教育を行い、本学の理念の実現に貢献

沈（しん） 瞳（ひとみ）

平成17年 3月
女子美術大学付属高等学校卒業

【受賞理由】
本学付属高等学校・中学校と中国・北京市にある中央美術学院附属中等美術学校との日中交流「友好の美 展」開催にあたり、日中両国の生徒・教員の橋渡しと、相互理解のために精力的な活動を行ったことが、本学の理念の実現に貢献

「日本赤十字社医療センター病棟壁画ヒーリング・アートプロジェクト」

【受賞理由】
医療施設に癒しの空間を創出する取組みを学生のグループ制作により実施するヒーリングアート活動は、学生の専門性を活かした社会貢献であり、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）にも採択され、本学の理念の実現に貢献

Series ー シリーズ歴史資料紹介⑫ ー

創立者のひとり　横井玉子先生Ⅱ

ー死してなお 学校に役立とうとする想いー

「其れ一国の美術は其国国民の文明知識信仰趣味の程度を説明するに足るものなれば 其進歩発展が一国の進歩発達に相伴随するや論なく其製作品の如何が国風の涵成に尠からざる影響を与ふるはいふ迄もなし（略）」に始まる女子美術学校設立願が、横井玉子、藤田文蔵、谷口鉄太郎、田中晋の4名によって東京府知事に提出され、明治33年（1900）10月30日に認可された。同年9月、玉子は16年間勤務した女子学院を退職し、女子美術学校開校の準備に取りかかった。驚くほど多方面の才能を持ち献身的な玉子に対して女子学院からは惜しみない賛辞が寄せられたが、その空席を埋めるためには3名もの教師が必要とされた。玉子が病を押し深夜まで友人知人を訪ね寄付金集めに奔走したのは、自らの命が長くないとの自覚もあったからでもあろう。当時としては珍しいほど豊かな人脈を持っていたので程なく資金は集まり、本郷弓町前田子爵邸の桜林を借りてこれを切り拓き校舎を建築、翌年4月8日開校に漕ぎつけた。ほとんど玉子一人の力で成し遂げられたこの偉業は、彼女が採算を度外視して激しく想いを貫く女性であったからこそ実現したと言える。

修業年	普通科3年 高等科・選科1年 研究科2年
入学資格	小学校高等科卒マタハコレト同等以上ノ学力ヲ有スルモノ
費用	入学金1円 授業料1円（高等科2円） 校長・学監・幹事は名誉職なので無給
書記・教員	8名
協議員	巌本善治（明治女学校校長）、川端玉章（東京美術学校教授・日本画）、高村光雲（東京美術学校教授・彫塑）、徳富蘇峰（思想家、親族）、戸川安宅（医者、親族）、矢島楫子（女子学院長、日本婦人矯風会長、親族）
校長	藤田文蔵（東京美術学校教授・彫塑、牛込教会長老）
教員	磯野吉雄（西洋画）、島田友春（日本画）、岩村透（美学・西洋美術史）、谷紀三郎（外国語）、久米桂一郎（美術解剖学）、岡田三郎助（西洋画）他

各種学校でありながら第一級の教授陣を揃え、カリキュラム内容からも本格的な美術教育への意気込みが窺える。開校後間もなく藤田文蔵校長によって入咫鏡（やたかがみ）に「美」の文字を刻んだ校章が定められ、生徒用には科別に色分けした房がつけられた。夏には教員の努力で女子美術協会が設立され、秋には第一回展覧会が行われた。しかし、当時女子が美術学校へ行きたいと言うと両親はもちろん親戚縁者からこぞって大反対を受け、中には家出同然で上京する者もいた。玉子の揚げた高い理想と現実との差は大きく、開校当時の入学生は僅か60名、学期途中から生徒を受け入れても経営は困難を極め、藤田校長が美術学校の俸給をつぎ込んでも焼け石に水であった。こうした状況は経営者内部に対立を生み、谷口鉄太郎、田中晋の二発起人が相次いで辞職、開校後半年にして廃校以外に途はないと思われる事態に追い詰められた。

翌年谷口鉄太郎と田中晋の二人は「東京女子美術学校」を設立したが間もなく閉校、一方、島田友春は明治36年「日本女子美術学校」を設立したが経営に行き詰まり他者に譲った。これらは当時、女子の美術学校がいかに育ち難い環境にあったかを物語っている。

明治34年11月10日、藤田文蔵と横井玉子の両名より第三代順天堂病院長男爵佐藤進博士夫人志津に誓約書「発起人タル事ヲ辞シ発起人タル権利ヲ貴殿ニ一任致シ候然レドモ我等本校ノ関係ヲ絶チ脱退スルノデハ無之 貴殿ノ御指導ノ下ニ誠実ヲ尽シ何時迄モ本校ノ為ニ勤勉可致ヲ此段誓約致シ候也」が提出され、翌35年1月を持って女子美術学校は佐藤家の経営するところとなり廃校の危機から救われたのである。

左が横井玉子、清子、右が横井左平太（のち伊勢佐太郎に改名）の墓

この年の冬、病魔に侵されながらも健闘を続けてきた玉子は病状悪化のため順天堂病院に入院し当時随一の名医として名高い佐藤進院長および志津により手篤く看護されたが、明治36年1月4日、ついに帰らぬ人となった。享年49歳、胃癌であった。

玉子は「吾身は解剖し医学の研究に吾骨は教授用として校内に」と遺言。死してなお役立とうとするその想いの深さは人々のさらなる悲しみを誘った。玉子の通夜は4日間にわたり、1月8日には日本初の校葬が谷中墓地（甲8号17側）夫左平太の眠る石碑の側らにてキリスト教式で行われた。女子美生400名、女子学院生200名に続いて一般会葬者が参列し、祈祷、賛美歌、聖書朗読、巌本善治や徳富蘇峰等の弔辞が行われ、全員涙にむせびながら別れを惜しんだ。鳩山春子、山脇房子、三輪田真佐子等著名な方々も参列した。

玉子死して百年余、気高く優しい魂は卒業生が国の内外で活躍して世を彩る花火をにこやかに天界より見ておられる。今や暮らしのどの分野でも美を必須とする時代となった。その先駆的な卓見を他の何人が予想し得たであろうか。

（元女子美術大学付属高等学校教諭　青木 純子）

JAM・2

なかやみわさん「絵本の世界を語る」

女子美も参加している「杉並区図書館ネットワーク」の企画として、去る10月1日杉並区中央図書館にて、本学卒業生の絵本作家なかやみわさんと立教女学院短期大学教授の高橋洋代先生を招き「絵本の世界を語る」という対談を行いました。当日は親子を含む多数の区民の方々にご来場いただきたいへん盛況でした。また対談日程をはさみ「なかやみわの“絵本の世界”」としてなかやさんの絵本等を展示しました。後日女子美の図書館でも展示しましたのでご覧になられた方も多いのではないでしょうか。今後もいろいろな企画を通して杉並図書館ネットワークを盛り上げていきたいと思います。女子美生のみなさんは区内大学図書館、公共図書館を利用できますのでどんどん利用して盛り上げてください！

（図書情報センター　重光　崇）

Topics ・6 公募展受賞者紹介

シェル美術賞2005

○本江邦夫審査員賞受賞

堀込　幸枝（大学院 修士課程 洋画研究領域 2年）

第41回神奈川県美術展

○大賞

三原　奈津子（大学院 修士課程 洋画研究領域1年）

○準大賞

栗原　優子（芸術学部 立体アート学科 4年）

○特選

小野　沙織（大学院 修士課程 洋画研究領域2年）

大石　泉（芸術学部 立体アート学科 4年）

○県立近代美術館賞

山岡　朋子（大学院 修士課程 洋画研究領域2年）

○はまぎん財団賞

松沢　真紀（芸術学部 絵画学科洋画専攻3年）

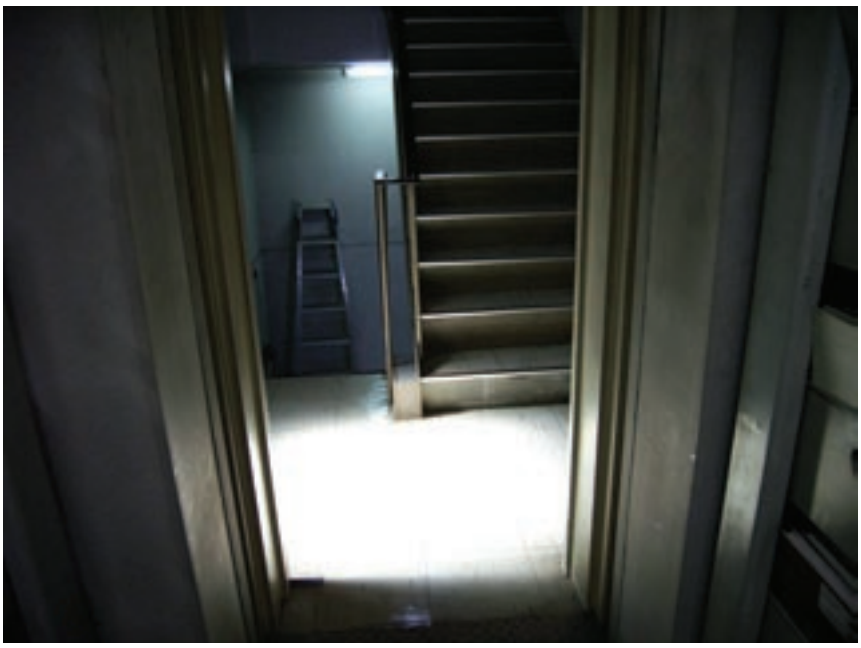
Summer Festival “Art Students’ Exhibition in NY” 2005

○ Richard Vine賞受賞

高　亜美（大学院 修士課程 立体芸術研究領域 1年）

Series ・ シリーズ 女子美探訪② 見て見て。

シリーズ第二回目です。卒業生で写真家の迫川尚子さんの撮る女子美をご紹介します。



撮る、だけでなく、焼く、のも写真家の仕事です。写真を一つの作品として考えると、焼きを始めたところから制作に入ると言っても過言ではありません。私も、そこに写真の醍醐味がある、と思います。ただ、私の場合、写真が目的なのか、街をうろつくのが目的なのか、はっきりしないところがありまして、どうしても撮ることの方に時間を割いてしまいます。だから、私は作家としては、寡黙です。あくまでも、作家としてですけどね。

写真家には、それ以外に、撮るのと焼くのとの合間に、選ぶ、というこれまた重要な仕事があります。私は、勿論、自分でも選びますが、人にも選んでもらいます。自分で撮った写真ですと、対象に惑わされることがあるからです。例えば、それが自分のよく知っている人で、いかにもその人らしい仕草をしていたら、それだけでその写真がよく見えてしまう。写真を写真として見ていないのです。撮りたての時など、特にそうですね。ある程度、突き放して見れるようになるまでの時間も必要です。

極端に言うと、写真には対象がない。と言いますか、これは撮る時より（撮るのは一瞬の出来事ですから）、選ぶ時に言えることですが、対象という見方をした時点で、固定観念に縛られている可能性があります。縛られたら、写真が見えなくなります。例えば、階段は、上の階へ登るため、また下の階に下がるためにあります。それは日常レベルでは、マチガイなくそうです。でも、階段は何のためにあるのか、見れば見る程わからなくなります。「階段」と呼んでいいのかすら、躊躇われます。では、そこに何があるか？あったか？光、影、奥行き、感触、気配…見るしかありません。写真として残されたものを、ただ見て見て、見るしかないのです。

迫川尚子（さこかわ　なおこ）［写真家］
鹿児島県種子島生まれ
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業

NEWS ・8 新理事長就任

平成17年11月1日付で、現学長である立石雅夫氏が新理事長に就任いたしました。

学校法人女子美術大学
理事長　立石　雅夫（たていし　まさお）
昭和19年2月17日生（61才）

広報課では女子美のニュースを募集しています。
お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報課》 TEL. 03-5340-4513
FAX. 03-5340-4523
［E-mail］prs@joshibi.ac.jp
発　行　学校法人　女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
企画・編集　企画部 広報課
監　修　原田　松野
発 行 日　2006年1月10日
URL http://www.joshibi.ac.jp